

唐古・鍵遺跡出土の絵画・記号土器と特殊土器

藤田 三郎

1. はじめに

本町では、平成21年度から採択された緊急雇用創出事業の1つとして「町内遺跡出土遺物整理事業」を実施している。平成23年度では、唐古・鍵遺跡の第23～33次調査について実施し、その一部については唐古・鍵考古学ミュージアムの春期企画展¹⁾において公開してきた。

唐古・鍵遺跡の調査については、概報や年報においてそのごく一部であるが報告しているが、田原本町での調査が初期であった1980年代では応急的な整理作業を実施したのみであった。このため、遺物の取り扱いについては、その基準が曖昧なまま収納しているものが多くあり、資料のデータ化・数量化ができないまま今日に至っているのが現状である。また、唐古・鍵遺跡の出土遺物は約12,000箱（W34cm×D54cm×H15cm）を保管しており、収納スペースの課題もかかえている。このような状況のため、遺物内容の圧縮も兼ねて実施している。

再整理を実施した唐古・鍵遺跡第23～33次調査は既に応急整理をおこない、その概要を6冊にわたって報告しているので主要な遺構遺物のことはそれらを参照してもらいたい²⁾。今回の再整理事業では、土器を収納しているコンテナを整理したため、土器類や土製品の選別が中心であった。土器類では搬入土器や特殊土器（ミニチュア土器・異形土器・赤色塗彩土器・転用土器・被熱土器）、絵画土器を、土製品では焼土塊等の抽出をおこなった。

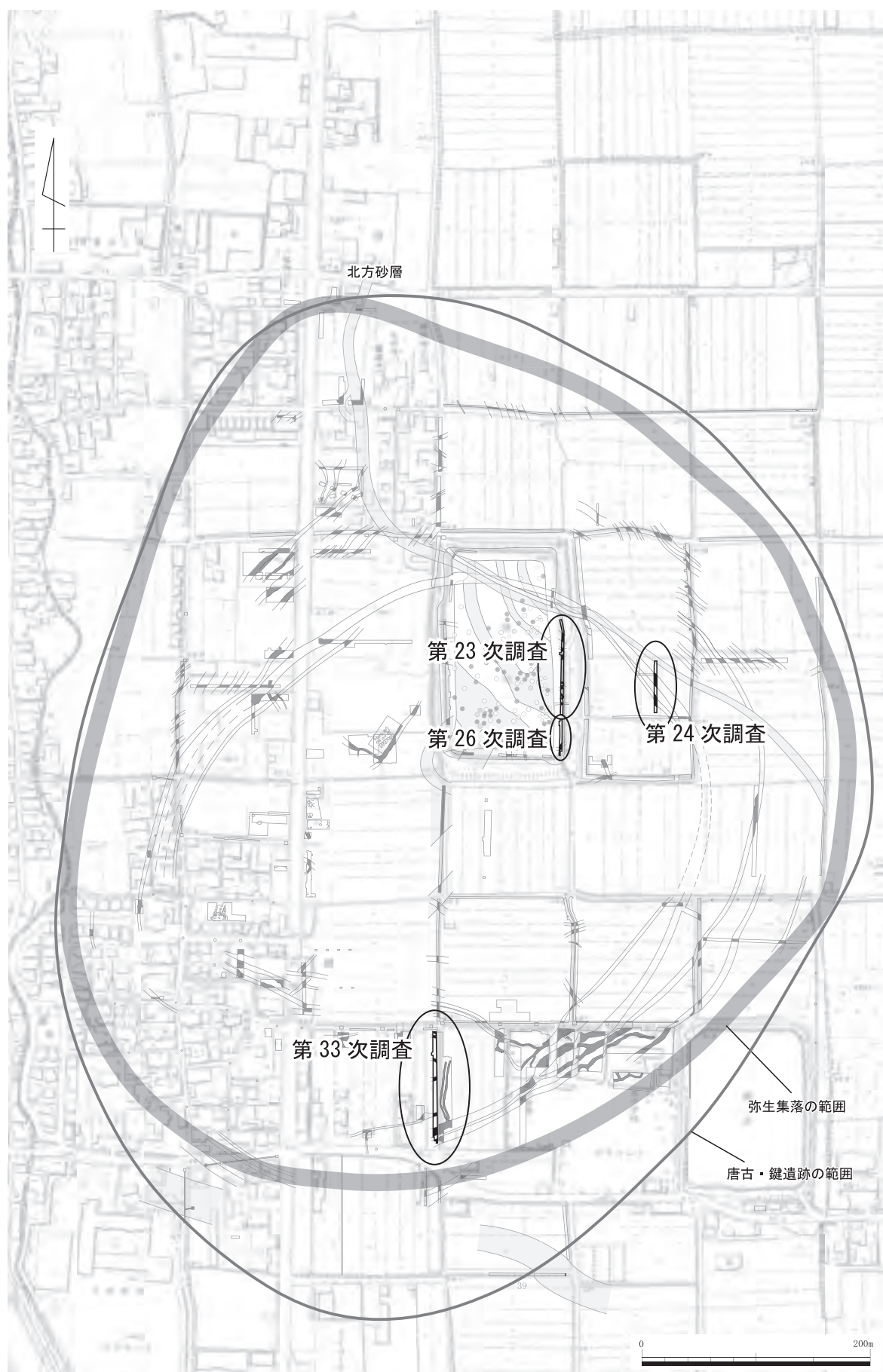
これらの再整理事業を実施した中で注目される遺物が多くみられたが、今回、特に重要と思われる絵画土器と異形土器について紹介する。絵画土器は、応急整理段階で発見し既に報告したのものもあるが、今回の再整理時に接合する破片を見つけることができたものや見落としで新たに発見したものも多くあったので、改めて集成し報告することとする。

2. 唐古・鍵遺跡第23～33次調査の概要

今回、資料紹介する遺物が出土した調査次数は、第23・24・26・33次調査である（第1図）。第23・26次調査は唐古池の内部である東側堤防下の調査で、池中央部分が第23次調査、池の南半から南東隅にかかる部分が第26次調査地である。この2つの調査区は、南北延長約150mに及び唐古・鍵ムラを囲む大環濠から内部の居住区にあたる。弥生時代前期から古墳時代前期までの遺構と中世の2時期の遺構遺物を検出している。特に第23次調査の第2トレンチでは、第1次調査（唐古池の調査）で検出された北方砂層の延長の砂層（SR-1101）を確認している。第1次調査の北方砂層では絵画土器が11点出土し、第23次調査のSR-1101でも小規模な面積であったが3点の絵画土器がみつまっていることから、絵画土器が濃密に分布する遺構といえよう。

第24次調査地は遺跡北東部に位置し、大環濠（SD-201）から内側の居住区にかかる場所を調査した。大環濠の内側には後期（大和第Ⅵ-2様式）に掘削された大溝が併行して掘削されており、多量の土器が出土した。これらの土器の中に、今回紹介する記号土器が含まれていた。

第33次調査地は、唐古・鍵遺跡の南端に位置し、集落南側を囲む環濠から居住区にかけての部分



第1図 各調査地位置図 (S = 1/5,000)

を調査した。弥生時代前期から古墳時代前期までの土坑や溝、柱穴などを多数検出した。前期末から中期・後期の遺構遺物が特に多い。第33次調査では、13点の絵画土器が出土したが、これらの多くは破片であり特別な出土状況を呈するものでない。ただし第2図-1に示した建物絵画の短頸壺はほぼ全容の把握できるものとして重要である。出土地点は大和第IV-1様式の井戸（SK-120）上部から出土しており、井戸との関係も考慮する必要があるかもしれない。他の絵画土器も大和第IV様式の遺構から多数出土しており、この時期の遺構は、絵画土器との関連も推測できる渦文タタキも含めてかなりの頻度で含まれている。さて、第33次調査地の東側隣接地の第69次調査では絵画土器28点が出土しており³⁾、第33次調査地と合わせると計41点になり、唐古・鍵遺跡の他の調査地と比較して絵画土器の出土密度が高い地点といえよう。第33次調査地を含む南地区では、銅鐸形や人形、鳥形の土製品、銅釦や銅鏃などの青銅製品など重要遺物が多数出土しており、絵画土器もその一連の遺物とみなすことができよう。

3. 遺物の紹介

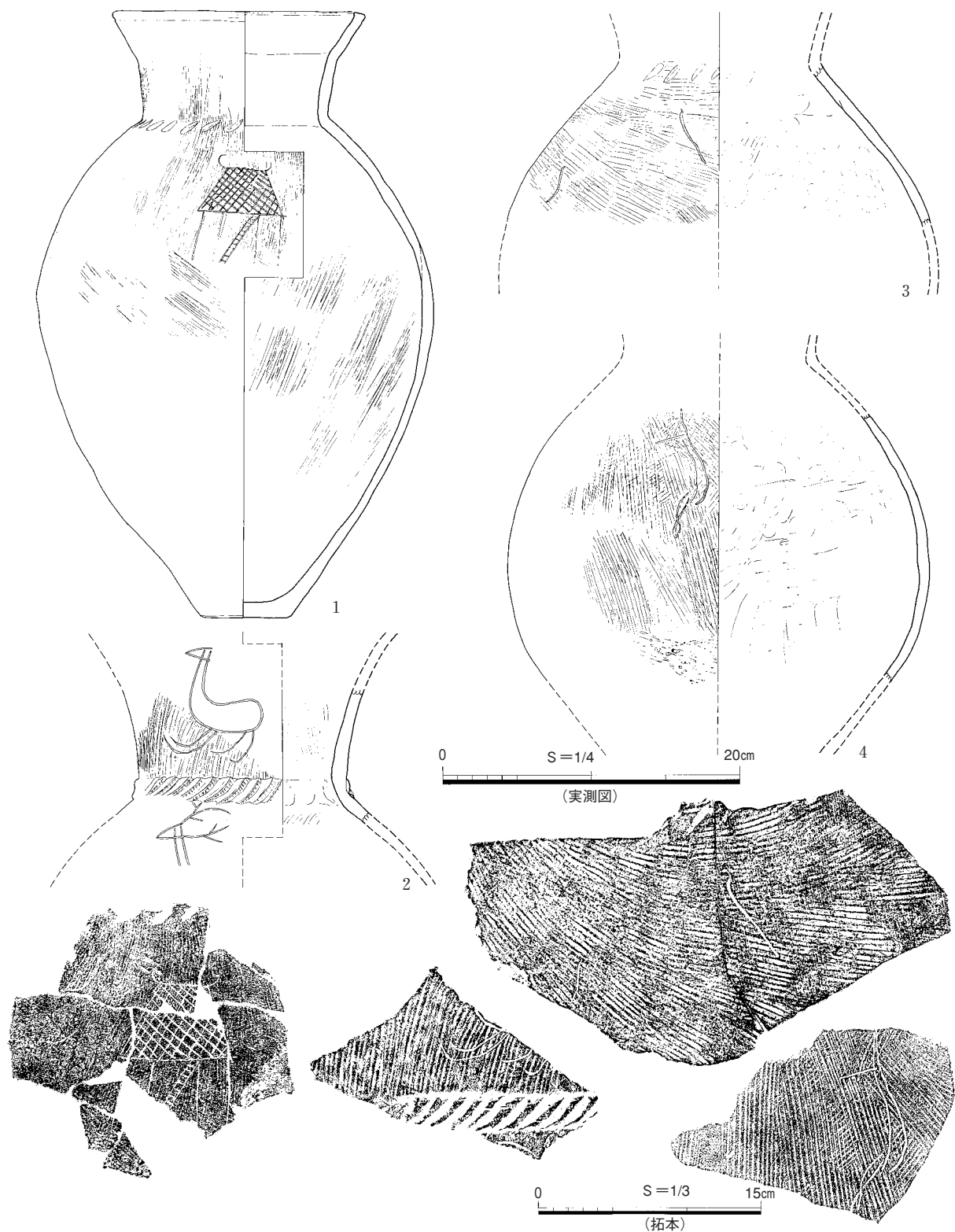
（1）絵画土器

建物 第2図-1は、短頸壺の胴部上半に描かれた建物である。本絵画土器は、既に第33次調査の概要報告⁴⁾で第39図-1として掲載したが、その後の整理作業において同一個体の破片が多数見つかりととともに接合しほぼ半完形の状態まで復元することができたものである。縦長の球形の胴部にやや外反ぎみに直口する口頸部がつくもので、絵画土器としてはほぼ全景のわかる貴重な資料である。SK-120とSD-115の上部である黒褐色土層を中心に出土したものであるが、鉄分を含んだ土層であったため、保存状態は極めて悪く土器の調整痕跡や絵画は見えにくい。内外面ともハケ調整で仕上げるが、胴部下半はケズリをおこなう。頸胴部界は、ヘラによる刺突文をめぐらす。口縁端部は面をもち内側に肥厚する。

建物絵画は、柱4本と台形の屋根で構成されるいわゆる「屋根倉式建物」である。4本の柱の中央には、右上がりの梯子が屋根下辺と右側から2本目の柱の交点にとりつくように架けられている。梯子は、平行する2本線で輪郭をとりその間を直行する短線で充填するもので刻み梯子を表現していると考えられる。屋根は縦長の台形であることから寄棟づくりの建物で、その内部は斜格文で充填し、両端の棟先には渦ではないが半円形の棟飾りが描かれている。建物絵画としては、整った建物を表現している。

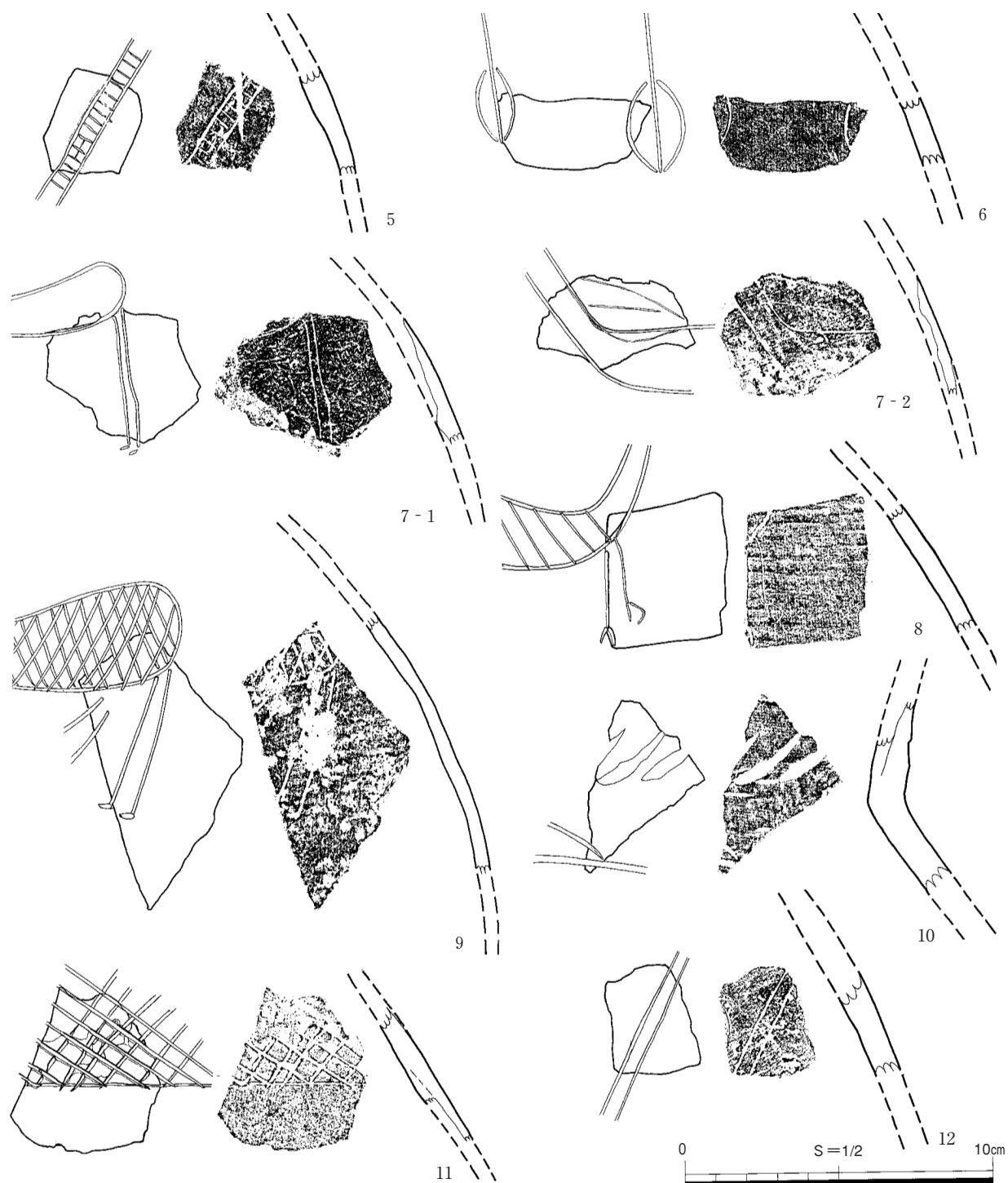
第3図-5は、建物の梯子を描いた壺の小片である。前述建物絵画の梯子と同様、平行する2本線で輪郭をとりその間を直行する短線で充填していることから梯子で良からう。梯子の規模がこちらの方が大きいので、建物も前者より大きい建物が描かれていたと思われる。

鹿 第2図-2・第3図-7～9は、鹿を描いたと考えられる破片である。2は、短頸壺の頸部と胴部上半の2つの部位に絵画が存在するもので例は少ない。頸部はハケ調整で仕上げ、頸胴部界には平坦にした粘土紐を貼り付け、その上にハケ状工具で列点をめぐらせている。頸部の絵画は、逆「し」の字状の曲線が2本単位で2組描かれたもので、左側の曲線の上端は横線でとまっている。以上のことから、左向きの鹿を表現したものであろう。脚先は跳ねるような表現方法で、清水風遺跡第1次調査に例がある⁵⁾。胴部上半の絵画は、残存率が悪く不明であるが曲線の方向や位置関係



遺物番号	器種	調査 次数	遺構	層位 / 土色	意匠	備考	共伴時期 (大和様式)
1	短頸壺	33	SK-120・SD-115	第0(上)層	寄棟建物	残存状況不良(鉄分付着)	IV-1
		33		第Ⅲ層			
2	短頸壺	23	SR-1101	第1層	頸部に左向きの鹿(脚4本)・胸部上端に不明絵画		IV-1
3	短頸壺	23	SR-1101	第1層	不明(縦線2)	内面に炭化物付着	IV-1
				第2層	左向きの鳥		
4	短頸壺	33	SK-120	第2層			IV-1
				第2(下)層			

第2図 絵画土器1



遺物番号	器種	調査 次数	遺構	層位 / 土色	意匠	備考	共伴時期 (大和様式)
5	壺	33		第Ⅰ(上)層	建物(梯子)		Ⅳ-1?
6	壺	33	SK-120	第4層	船(櫂2本)		Ⅳ-1
7-1	壺	33	SK-120	第0層	左向きの鹿(後脚2本)		Ⅳ-1
7-2	壺	33	SD-115	第1層	左向きの鹿(頭部)		Ⅳ-1
8	壺	23	SR-1101	第1層	右向きの鹿(前脚2本)		Ⅳ-1
9	短頸壺	33	SD-109	第7層	左向きの鹿(胴部・後脚2本)	残存状況不良(摩滅)	Ⅳ
10	短頸壺	33	SK-105	第3層	不明(斜線2本)		Ⅳ-1
11	壺	23	SD-1101	第2層	不明(斜格文)		Ⅳ
12	壺	33		第Ⅲ層	不明(鹿の脚か)		Ⅳ?

第3図 絵画土器 2

から左向きの鹿角が描かれている可能性がある。第23次調査S R-1101出土である。

7は、壺と推定される2つの胴部破片に絵画が描かれている。いずれも左向きの鹿を描いたと推定されるものであるが、被熱のためか残存状況は悪い。線刻は細く弱々しく、やや稚拙な表現にみえるものである。7-1は鹿胴部の下辺と後脚2本、7-2は胴部から頸部にかけて描いたものであるが、同一の鹿の部分かどうかは判断できない。7-2では、頸部から胴部に至る背中側の線刻が描き直しされている。また、頸部から細く浅い斜線の線刻が2本みえているが、これが何を表現したものか、鹿と一連のものなのか不明である。これらの2片の鹿胴部の内側には、斜格文はみられない。第33次調査S K-120とそれに隣接するS D-115から出土している。

8も壺と推定される破片に描かれた鹿である。壺の外面には、やや太めのタタキが施されている。右向きの鹿で、前脚2本と胴部から頸部にかかる部分の線刻がみられる。足先は二股に分かれており、偶蹄類をよく観察した結果であろう。この足先の二股表現は、唐古・鍵遺跡第1次調査の北砂資料⁶⁾や第69次調査例・戸田秀典氏採集資料⁷⁾にみられるが、数多く描かれた鹿の足先表現としては、ごくわずかな資料である。これら資料では4例中3例が右向きの鹿であり、数少ない右向きの鹿表現のなかで足先の二股表現がとられていることが注目される。胴部は斜格文を充填している。第23次調査S R-1101出土である。

9は左向きの鹿を描いた短頸壺胴部の破片である。保存状態は悪く全体に摩耗している。外面にはタタキが施されている。後脚2本と斜格文を充填した胴部の一部が残存している。足先は少し前方に跳ねることによって足先を形作っている。全体的には少し突っ張るような動作表現で、唐古・鍵遺跡特有の鹿姿態である。この後足の少し左側にも平行する2本線がみられるが、後脚にちかいことから前脚でなくこの鹿の下側に描かれた別の意匠の部分であろう。

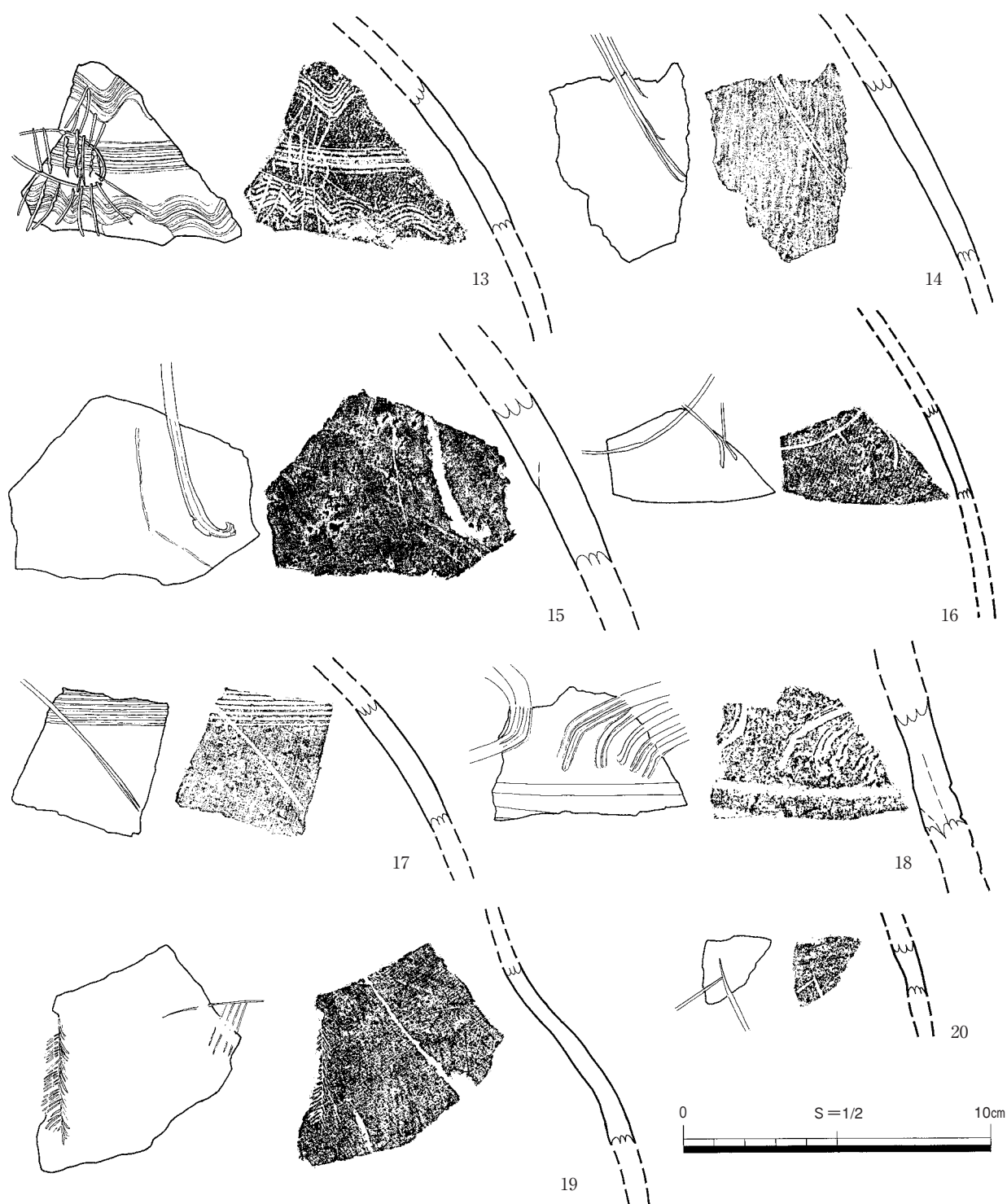
鳥 第2図-4は、短頸壺胴部上半に描かれた鳥である。胴部上半はハケ、下半は横方向のケズリがみられる。絵画は、細長の瓜状の部分で胴部とし下端に2本の脚、上端に1本の横線で頭部（嘴）を表現していると推定される。2本の脚は途中で交差している。かなり稚拙な表現である。第33次調査S K-120出土。

船 第3図-6は、壺の小片で胴部に船の櫂を表現したものと推定される。外面は、丁寧なナデ調整で仕上げている。下向きの木の葉状の線刻があり、櫂とすれば2つの間隔がかなりあいており、また櫂ひとつの表現が大きいことから船全体はかなり大きな船が描かれたと考えられる。第33次調査S K-120出土。

不明意匠 第2図-3、第3図-10~12、第4図-13~20、第5図-21~27、第6図-28は、いずれも断片資料のため、絵画意匠を特定することができない。

13は、櫛描文様の壺胴部に描かれた絵画である。胴部には櫛描きの波状文と直線文が描かれており、それら文様に重なるように意匠不明の絵画が描かれている。絵画は、楕円を描いた後、その内部を縦線で充填するとともに楕円形の上と下に縦線を不揃いに線刻したものである。スッポンにちかい形態であるが特定できない。何らかの動物を表した可能性がある。第33次調査S D-108から出土した土器片で、大和第Ⅲ-3様式の可能性があり、唐古・鍵遺跡でも古い絵画の1つである。

18は、器台に描かれた絵画である。弧線が重なるような線刻である。線刻は、工具の先端が二股に分かれていたと思われるもので、太線と細線が一对になった工具である。



遺物番号	器種	調査 次数	遺構	層位 / 土色	意匠	備考	共伴時期 (大和様式)
13	壺	33	SD-108	第1層	不明 (楕円に放射線)	櫛描文様上に絵画	Ⅲ-3?
14	壺	23	SD-151	第1層	不明 (3本の右下がりの斜線)		Ⅲ-3?
15	壺	33	落ち込みⅢ	第2層	不明 (「し」字状)	大形壺	V
16	壺	33	落ち込みⅣ	第0層	不明 (曲線3本)	工具先端は2本 (太・細) に分岐	V?
17	壺	23	SD-106	第1層	不明 (右下がり斜線)	櫛描文様上に絵画	Ⅲ-2?
18	器台	24		第Ⅳ-c (下) 層	不明 (曲線6本)	工具先端は2本 (太・細) に分岐	Ⅳ?
19	壺	33	SK-159	第2層	不明 (右上がりの綾杉状・斜線4本)	ヘラミガキで斜線部を消去	Ⅳ-1
20	壺?	33	落ち込みⅣ	第1層	不明 (交差)		不明

第4図 絵画土器 3

19は、壺胴部上半に描かれた絵画で、外面はナデ調整後に2つの絵画が描かれていたと推定されるものである。左側の絵画は、縦方向の綾杉文風のもので線刻は細く繊細に描いている。左部分が欠失しているため、判断できないが、建物等の一部の可能性もあるだろう。綾杉文風の表現は、唐古・鍵遺跡第98次調査出土の建物絵画の「縁」あるいは「露台」の先に表現している例がある⁸⁾。右側の絵画は左下がりの斜線4本と横線1本が確認できるが、ミガキによって線刻が消されている。この両絵画の空白部分の下半には、軽くケズリをおこなっている部分があり、胴部上半でのケズリ調整はまず存在しないことから絵画が消された可能性がある。したがって、右側の一部残存する線刻とケズリ部分が一連となる絵画があった可能性もある。

21は、斜格文を内部に充填した絵画であるが、輪郭線が欠損しているため、意匠は不明である。横線を境に上下に斜格文を充填する。下側の斜格文の右端には、爪先と思われる刺突文が縦列につけられている。また、その刺突文の右側の斜格文はミガキによって消されている。全体的にみれば、建物絵画の可能性はあるだろう。

22は、壺胴部の上半に描かれた絵画である。ハケ後のナデ調整の上に細線の線刻で描いている。下向きの三日月状の輪郭の内部に斜線を充填したものである。輪郭の下辺の左方には下方へのびる線がわずかに残っている。この部分だけの輪郭では意匠判断は困難であるが、第76次調査の鹿の臀部表現にちかいものが存在する⁹⁾。

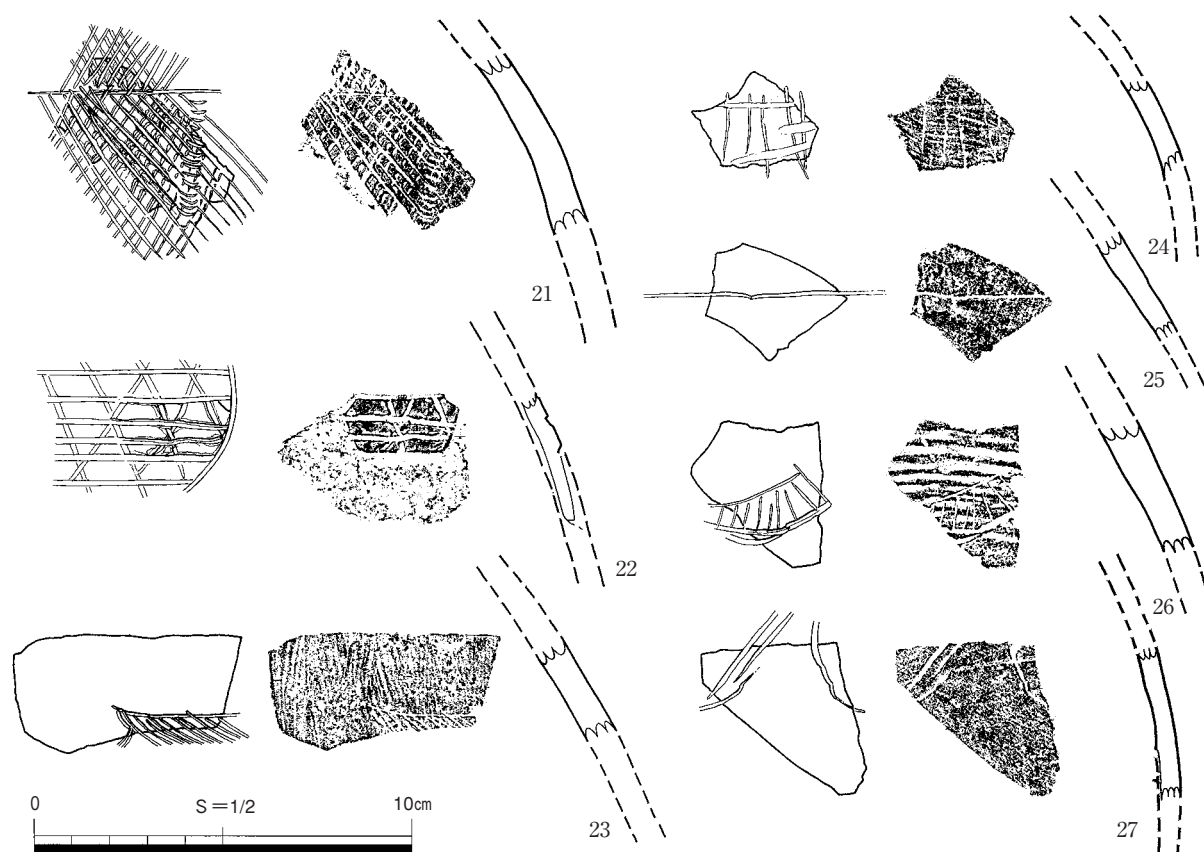
26は、外面にタタキを施した小片である。タタキの上にやや湾曲する長形状の輪郭をもつ線刻が描かれている。その下辺の線刻は太く、足し描きあるいは描き直しの線とみられる部分がわずかに残っており、2重になっている。この輪郭線の内部は縦線を充填している。小片のため、全体像の類推は難しいが、船の舳先のようにもみえる。

28は、大和第Ⅶ-1様式の壺胴部に描かれた絵画あるいは記号的なもので、絵画とすれば新しい部類のものである。3つの破片しか残存していないので全体は不明である。線刻は、胴部上端部に横方向のジグザグ線を、その下に縦方向の斜線を逆扇形に描いている。線刻は基本的に2条が1単位になっているが、2条の線刻の幅は一定で無く、また、1つの線刻幅も太細があることから、工具は先端が平たくフレキシブルな動きをするヘラ状のものであったと考えられる。

上記以外の線刻は、小片でその一部のみが残存している程度である。斜線や輪郭不明なものも多く意匠が特定できないが、絵画として掲載しておく。

(2) 記号土器

第7図-1は、第24次調査地の南端で検出した後期の環濠(SD-107)の中層から出土した広口壺である。破片で散在して出土したが、ほぼ完形に復元できた。球形の胴部に直立ぎみの口頸部がつき、口縁部は内湾する。全体的に丁寧なつくりで、胴部上半には細条のハケ調整を施した後、ナデ調整で仕上げる。口縁部はヨコナデを施す。本土器の特徴は、胴部上半に並列的な記号をめぐらすことである。記号は胴部の約半分を占めており、右から2条の円弧線(a)・やや左に傾斜した6本の縦線(b)・壺の胴部中央に渦状の線刻(c)とその右側に4本の横線(d)・渦状の線刻の左側(e)とその上部(f)に不明記号が描かれている。aの円弧線は、右端が収束する。線刻は細く部分的にナデによって消えている。bの縦線は、aよりやや太く鮮明な線刻である。bの縦線と

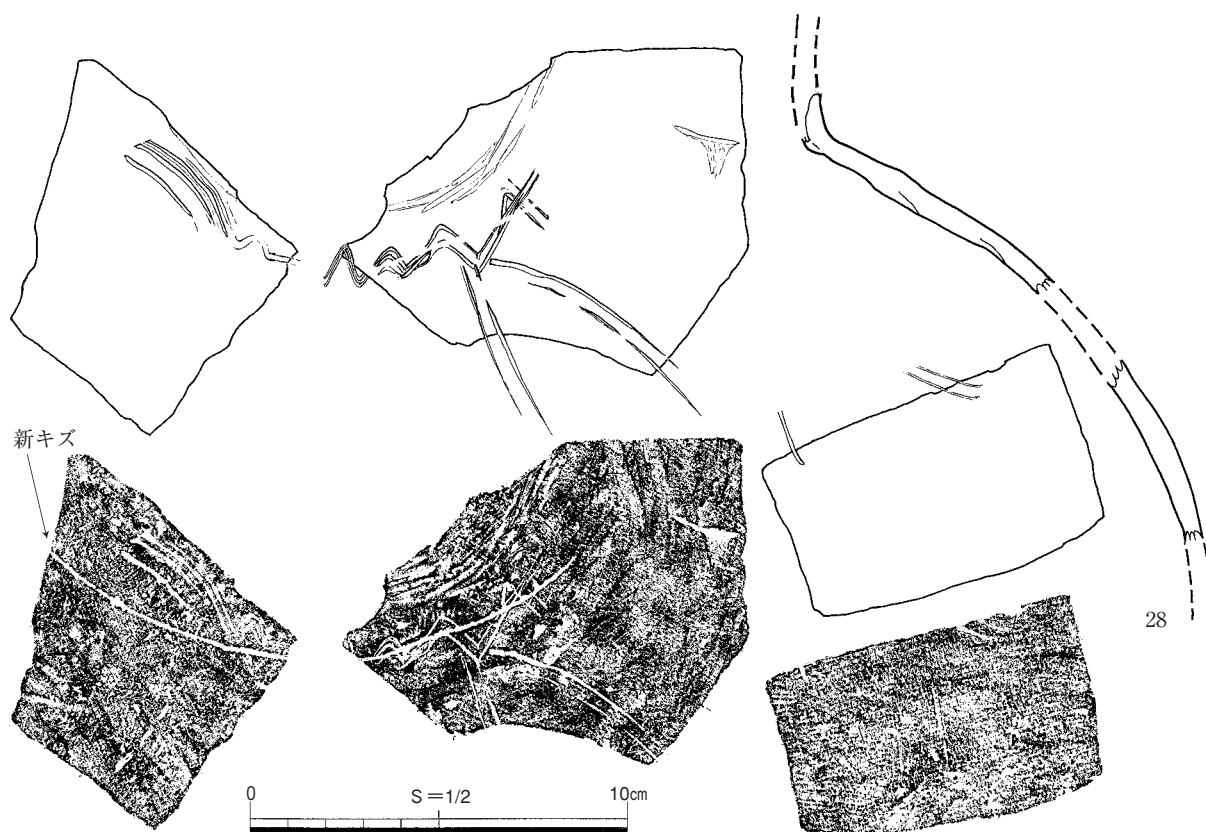


遺物番号	器種	調査 次数	遺構	層位 / 土色	意匠	備考	共伴時期 (大和様式)
21	壺	24	SD-201	第7層	不明 (斜格文に縦位の爪圧痕)		Ⅲ-4?
22	壺	26	SD-2101	第1層	不明 (斜線に囲み)		Ⅲ-3?
23	壺	26		第Ⅱ層	不明 (斜格文に横線)		Ⅳ?
24	壺?	24	SD-107	第4層	不明 (縦線5本)	ヘラミガキで縦線の一部を消去	Ⅳ?
25	壺?	24		第Ⅳ-c層	不明 (横線1本)		Ⅳ?
26	壺	26		第Ⅰ層	不明 (斜線に囲み)		Ⅳ?
27	壺	26	SD-2010	第1層	不明 (斜線3本)		中期

第5図 絵画土器4

その左側の d・f の線刻との間は少し空間があり、記号としては a・b と c～f の2つの群にわけることができる。c の渦状の線刻とその右側にとりつく d の横線、その上部の不明記号 f の線刻は、深くて明瞭であるが、渦状線刻の左下には消された線刻らしきものも存在する。この渦状の線刻の中央部は欠損しているが、内面側にひろがる剥離痕がみられ、穿孔の可能性が高い。

今回の記号土器は、大和第Ⅶ-3 様式に所属するもので、記号土器として唐古・鍵遺跡で盛行した時期のものである。唐古・鍵遺跡では、単独の記号も多くみうけられるが、今回のように並列的な記号を配するものも量的にはある程度を占めている。並列的な記号を読み解くことは困難であるが、並列的に配することに重要な意味があることを示しており、記号体系として高く評価する必要がある。今回の記号がどのようなものかを示しているのかは判断できないが、胴部中央に描かれたメインと考えられる渦状の線刻は、その形態から龍あるいは弧帯文的なものの変形として推定することができよう。また、不明記号 f は唐古・鍵遺跡第3次調査の短頸壺例に類似する形態の記号が認められ¹⁰⁾、これも龍の鰭を表現している可能性があるだろう。



遺物番号	器種	調査 回数	遺構	層位 / 土色	意匠	備考	共伴時期 (大和様式)
28	壺	24	SD-201	第1層	不明 (ジグザグ線と弧線)	工具は先端が2本に分岐	VI-1

第6図 絵画土器 5

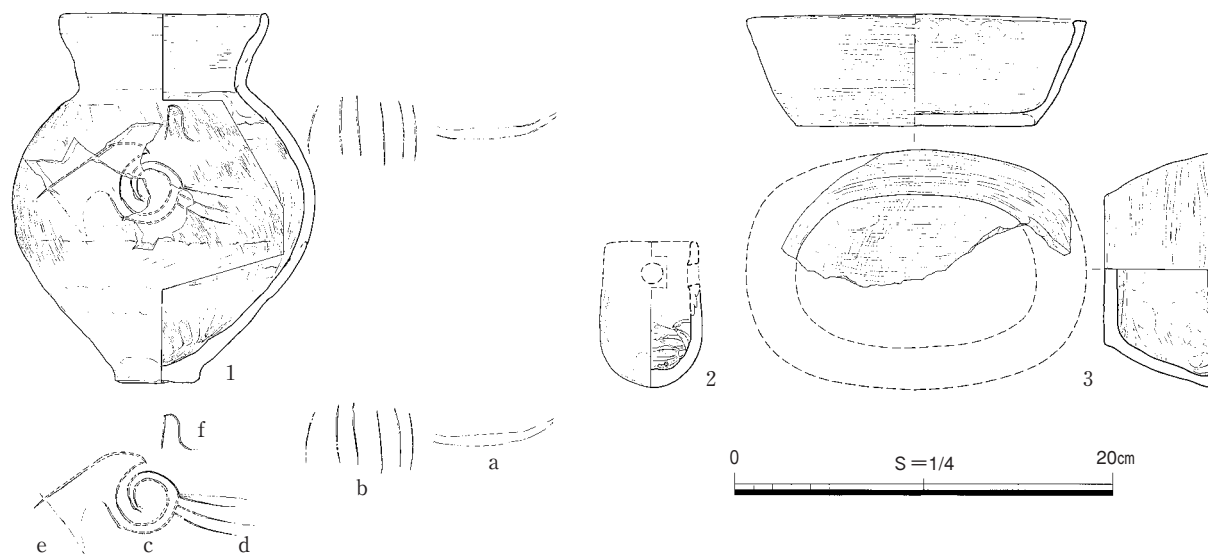
(3) 特殊土器

第7図-2は、飯蛸壺と推定される底部片である。丸底の底部に直立ぎみに立ち上がる胴部をもつ。胴部の径は、5.5cmほどに復元できる。外面はナデ調整で仕上げられているが、全体に器面が摩耗しており、使用痕跡の可能性がある。内面は、底部をヘラで掻き取り成形した後、胴部にかけてナデ調整を施す。色調は淡乳褐色を呈する。本土器も第23次調査S D-151の第1層から出土したもので、大和第Ⅲ-2様式に所属する可能性が高い。

第7図-3は楕円形の鉢で、約1/4が残存している。復元すれば、長軸18cm・短軸12.5cmほどの口縁部を有し、高さ6.2cmの浅い鉢になる。口縁部は、わずかに内方へ肥厚する。内外面は丁寧なミガキ調整をおこなう。内面の口縁部下は、わずかに指頭圧痕のくぼみが残るが、全体に丁寧なつくりの鉢といえよう。このような形態の鉢は、唐古・鍵遺跡第13次調査で出土した楕円形の坏部を有する異形高坏を除き、例がないものである。木製品を模したものであろうか。第23次調査S D-151の第1層から出土したもので、大和第Ⅲ-2様式に所属する可能性が高い。

4. まとめ

今回紹介した絵画は、大半が弥生時代中期後半の大和第Ⅳ様式に所属すると考えられるもので、唐古・鍵遺跡で最も盛行した時期のものである。大和第Ⅳ様式以前の絵画土器としては、第4図-



第7図 記号・特殊土器

13・14・17、第5図-21・22の絵画土器があり、第Ⅲ様式に所属すると思われるものである。特に13・17の土器は櫛描文をめぐらせた「飾られた壺」で、その櫛描文様に重なるように不明絵画を描いたものである。大和第Ⅳ様式になって、短頸壺のように飾られない壺に絵画を描くことが主流になる以前、飾られた土器にも絵画を描くことが存在したことは注目される。これは唐古・鍵遺跡だけでなく、橿原市四分遺跡や宇陀市平尾東遺跡など大和の他地域の遺跡¹⁾でも時期と器種が連動して存在しており、大和での絵画を土器に描くという行為の初期様相として捉えることができよう。これら資料は、本遺跡でも古い時期に位置づけられる絵画資料として重要であろう。

一方、第Ⅴ・Ⅵ様式の絵画もわずかに存在する。いずれも具体的な絵画意匠を示すものではない。特に第6図-28は、絵画というよりは記号的になったもので退化傾向が読み取れる資料となろう。その延長の資料として、第7図-1の記号土器が位置づけられる。この記号土器は、かなり抽象化が進んだものと理解できそうで、龍・弧帯文との関係も想定できる資料となろう。また、並列的な配置を有する点も重要である。

特殊土器として、楕円形の鉢と飯蛸壺を紹介したが、いずれも唐古・鍵遺跡では類例の少ないものである。特に前述資料が飯蛸壺として認められるならば、唐古・鍵遺跡では2例目になり、時期的には弥生時代中期中葉の古い時期に位置づけることができるものとなる。唐古・鍵遺跡の食材流通を含めた交流を考える上で重要な資料となろう。

註

- 1) 田原本町教育委員会 2012「唐古・鍵遺跡再整理事業」『村を守る』唐古・鍵考古学ミュージアム展示図録 Vol.14
- 2) a. 田原本町教育委員会 1986「唐古・鍵遺跡第22・24・25次発掘調査概報」『田原本町埋蔵文化財調査概要4』
- b. 田原本町教育委員会 1987「唐古・鍵遺跡第26次発掘調査概報」『田原本町埋蔵文化財調査概要7』

- c. 田原本町教育委員会 1987「唐古・鍵遺跡第27・28次発掘調査概報」『田原本町埋蔵文化財調査概要 8』
- d. 田原本町教育委員会 1987「唐古・鍵遺跡第29・30次発掘調査概報」『田原本町埋蔵文化財調査概要 9』
- e. 田原本町教育委員会 1988「唐古・鍵遺跡第21・23次発掘調査概報」『田原本町埋蔵文化財調査概要 6』
- f. 田原本町教育委員会 1989「唐古・鍵遺跡第 32・33 次発掘調査概報」『田原本町埋蔵文化財調査概要 11』
- 3) 田原本町教育委員会 2009「絵画土器・土器文様・特殊タタキ文様」『唐古・鍵遺跡Ⅰ 特殊遺物・考察編』
- 4) 註 2 -f)に同じ。
- 5) 奈良県立橿原考古学研究所編 1987「清水風遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報 1986年度』第28図－15・17
- 6) 末永雅雄・小林行雄・藤岡謙二郎 1943『大和唐古弥生式遺跡の研究』京都帝国大学文学部考古学研究报告第16冊 第62図－7
- 7) 藤田三郎 2006「唐古・鍵遺跡出土の鹿を描いた土器」『田原本町文化財調査年報14 2004年度』田原本町教育委員会
- 8) 註 3、遺物図版 1－P 5005
- 9) 田原本町教育委員会 2006「弥生の絵画」『田原本の遺跡 4』48. 稚拙な表現の鹿
- 10) 田原本町教育委員会 2009『弥生グラフィティ』唐古・鍵考古学ミュージアム展示図録 Vol.10
- 11) 藤田三郎 2003「絵画土器・特殊土器」『奈良県の弥生土器集成』大和弥生文化の会 第57図－178・第58図－179

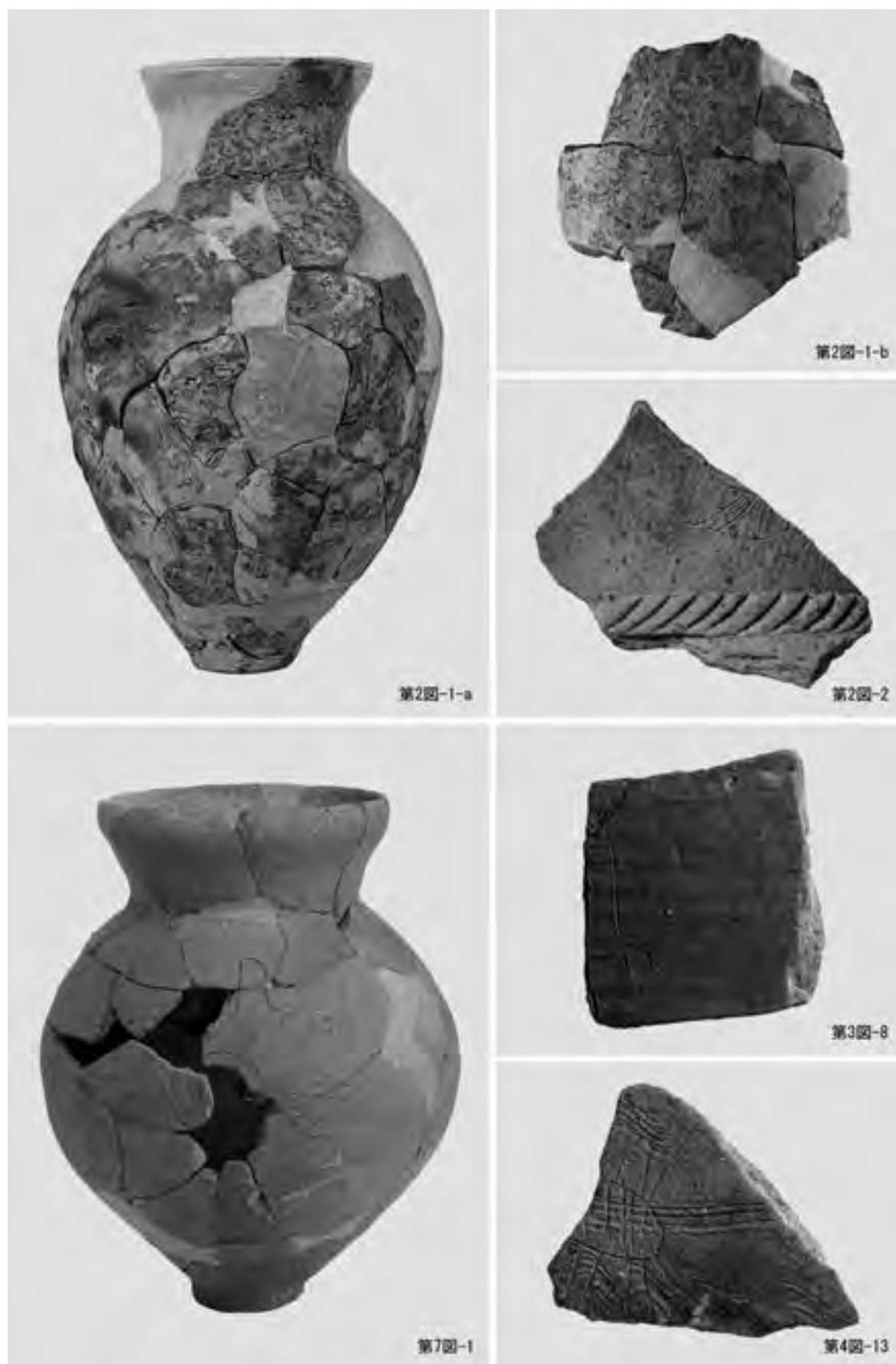


写真1 絵画土器・記号土器